

白山神社所蔵史料 「元治元年 田貫村惣堂 御堂普請諸造用覚帳」について

原戸 喜代里

1. はじめに

京都市右京区京北田貫町^{たぬき}に位置する白山神社^{はくさん}は、田貫村の産土神^{うぶすながみ}として、現在も住民の信仰を集めている。その本殿が、平成28年3月31日、京都市指定有形文化財として指定された。白山神社の建築を調査する過程で、文明2年(1470)～15年(1483)及び寛永年間の勤務表、御堂や拝殿、社務所に関わる普請文書、宮道具控等が神社に所蔵されていることがわかり、田貫村における近世の神社運営状況の一端を知ることが出来た。

ここで紹介する「御堂普請諸造用覚帳」も白山神社所蔵史料のひとつで、白山神社西方の高台に建つ「田貫村惣堂」の元治元

年(1864)の普請に関わる文書である。

2. 田貫村惣堂について

「田貫村惣堂」の「惣堂」とは、中世村落の自治組織である惣によって維持されてきた仏堂¹⁾で、宗派に属さず、住持職もない「みんなのものでありながら、だれのものでもない、村人たちが「寄り合っ建てた堂」のこと²⁾である。丹波地方には、このような「村持ちの堂」の存在が確認されている³⁾。

元文5年(1740)の園部藩寺社奉行による「寺社類集」⁴⁾によると、田貫村には龍泉寺と正法寺という寺の他に宗派に属さない「観音堂 五間二七間 建立年歴不



図1 白山神社及び観音堂 位置図

知」の記述があり、さらに「三十三所 観音堂 五尺一間 享保五年郷民安右衛門 建立之 右在観音堂之内」とある。この観音堂が、「田貫村惣堂」である。

先行研究によると⁵⁾、惣堂は、檀家寺や産土神とは独立して位置する村の重要な宗教施設のひとつであった。村人が維持し、信仰や祭、集会など多目的に利用された惣堂は、村内の小高い場所や主要道路に近接して建てられた。3～5間の規模を持ち、本尊を安置する内陣と広い下陣からなり、組物や虹梁、彫刻などの装飾的要素は少ない建築であるという共通した特徴を持つ。

京北田貫町檀町の観音堂は、「老朽化した観音堂を村人の浄財を集めて安永8年(1779)8月18日に再建した⁶⁾」と伝えられており、その後、元治元年、昭和41年

にも普請工事が行われた。

屋根形式は宝形造^{ほうぎょうぞう}、杉皮葺きである。堂内は、三十三所観音を安置する内陣と土間空間の下陣からなる。正面の棧唐戸^{さんからど}の両脇には火頭窓^{かとうまど}を配する。柱は彫刻の施された虹梁^{こうりょう}で繋ぎ、端部に木鼻^{きばな}が取り付く。虹梁の上部中央には墓股^{かえるまた}を配する。惣堂としては、比較的装飾的な要素が多く、絵様や木材の状況からみて、後の改修によるものと見られる。

田貫では、毎年8月18日に村内安全と先祖供養のため「高張り」が行われる。白山神社から観音堂までの沿道には三十三所観世音提灯が灯され、村人は、高張提灯2張を高く掲げ、囃子を奏でながら、白山神社から観音堂まで巡行する。観音堂までの巡行が終わると公民館前の広場で盆踊りをするという。



写真1 京北田貫町 観音堂全景



写真2 観音堂正面



写真3 「高張り」巡行の様子(個人所蔵)



3. 「元治元年 田貫村惣堂 御堂普請諸造用覚帳」について

「御堂普請諸造用覚帳」は、まず寄進等収入を示す「上り方覚」が記され、次に普請にかかる出費を記した「覚」、最後に普請の収支の集計が記されている。

「上り方覚」に記載されている寄進者を見てみると、田貫村の住民だけでなく、佐々江村、中佐々江等、田貫町の西、現在の南丹市日吉町佐々江の住人が寄進していることがわかる。また、白ヶ谷は、日吉町佐々江白賀谷とみられ、「白ヶ谷の嘉兵衛」も隣の佐々江村の住人であったと考えられる。

「宮の方木代」とあるが、この宮は白山神社を指すと考えられ、白山神社境内の木を売って得たお金を計上したと考えられる。

普請にかかる出費を記した「覚」では、物品の購入記録と、職人に対する人件費が分けて集計されている。

物品の購入記録には、日付と購入した物品が記される。これにより、手初め（工事の着手日）、木切り（木材の刻み）、大工初め、建前（上棟）、石場付という普請の節目にあたる日には、酒や肴が振る舞われていたことがわかる。また、「さは（鱈）」「しらこ（白子）」「鯉」などを購入しており、若狭から旧高浜街道を通過して運ばれてきた海産物が、田貫村で食されていた様子も見て取れる。

職人に対する人件費の記録では、観音堂の普請を手がけた職人の名前も記されている。

大工は、栄吉と豊吉で、この大工は、「上り方覚」にも「山の神森 六拾刃 大工 栄吉 豊吉」と名前が記されていることから、地元の大工である可能性が高い。白山神社本殿の附として指定された、天明元年（1781）及び2年（1782）の奉納木樋2丁には、「若州高濱大工江上傳次郎」と若狭大工の名前が見えるが、幕末の惣堂の建築には地元の大工が関わっていたと考えられる。

木引は、伐採した木を適当な長さに切って木材にする職人で、宇兵衛に賃金を支払っている。一方、杣日用の代金は70人に支払っているが、杣は伐採する者、日用は、切り出して集めた木材を運ぶ者をいう。木引、杣、日用と林業が分業化している様子が見られる。

また、釘屋、杉皮50束の代金を支払っていることから、元治元年当時の屋根も現在と同じ杉皮葺きであった事がわかる。

黒鍬^{くろくわ}6人の黒鍬は、近世では土木作業を行う者を指す。家敷引、石場直しとあることから、曳家をして、基礎を修理したと考えられる。現在の観音堂の基礎はコンクリートで固められているが、柱は井桁に組んだ土台の上に立っており、当初はこの土台が礎石の上に載っていたため、比較的容易に土台を持ち上げて曳家をすることができたと思われる。

観音堂の地鎮祭は、「拾刃 中道寺 地祭礼」とあることから、中道寺が執り行っていたことがわかる。ここに記されている中道寺は、京北町上中の南光山中道寺のことである。白山神社の祈祷札に「別当中道寺 多門院」とあり、中道寺は白山神社の別当寺であった。白山神社及び観音堂の維持

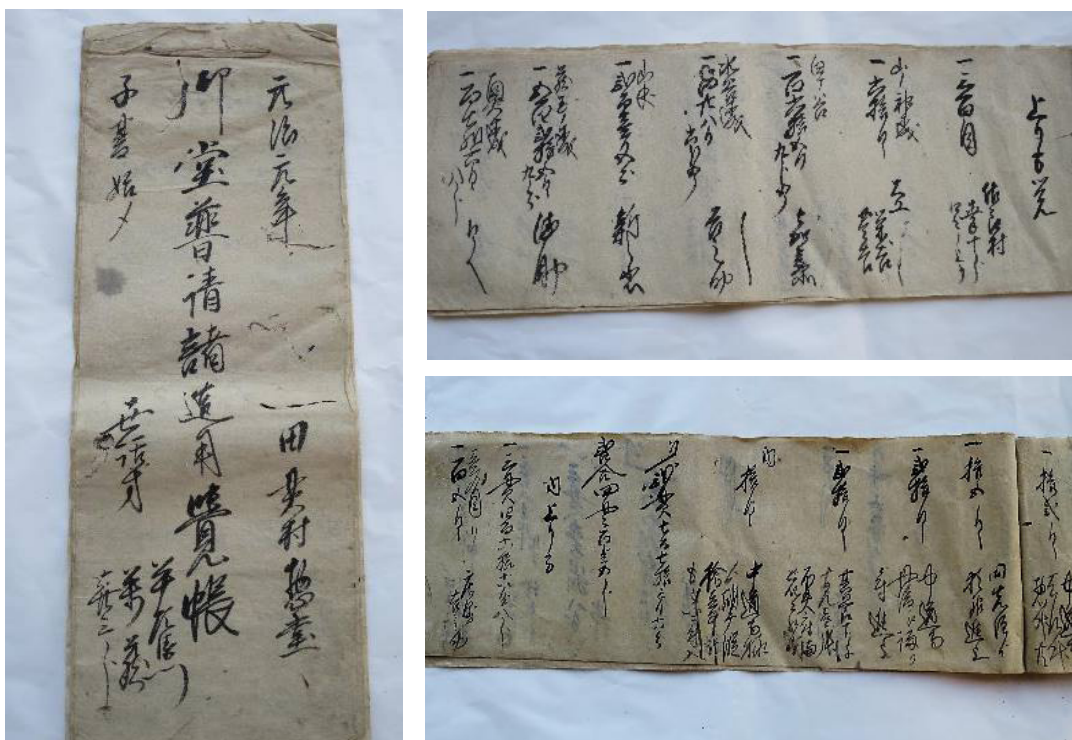


写真4「元治元年 田貫村惣堂 御堂普請諸造用覚帳」

管理や運営は村人が行っていたが、地鎮祭や護摩焚き等の宗教的な儀式は、中道寺の僧侶が行っていたことが史料より見て取れる。

元治元年に行われた田貫村惣堂の普請事業の集計を見てみると、支出「四貫百匁五分」に対し、収入は「三貫九百四拾八匁六厘」に「百目 木代入 山神の森」と山神の森の木を売った代金を加えたものとなり、最終的には「引残五拾貳匁四分四厘」と、支出が収入を上回ったことになる。集計は世話方の半左衛門が行った。

今回紹介した「御堂普請諸造用覚帳」から、田貫村における近世の惣堂の普請の様子を垣間見ることができた。今後は、白山神社に所蔵されている他の普請文書も合わせて調査し、近世の惣堂の普請状況を明らかにしていきたい。

謝 辞

本論の作成にあたり、白山神社総代（当時）前西氏に多大な協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

註

- 1) 森雄一「惣堂・村堂の存在形態—京都府和知町の事例を通じて—」『日本建築学会計画系論文集』第573号，2003年11月，141-146頁。
- 2) 藤木久志『中世民衆の世界 —村の生活と掟』，岩波新書，2010年5月20日，68頁。
- 3) 熊本達哉「丹波地方における「堂」について —「村堂」に関する基礎的考察—」『日本建築学会大会学術講演梗概集』，1995年8月，135-136頁。
- 4) 園部町教育委員会、『社寺類集』，1977年。
- 5) 前掲1) 及び3)
- 6) 北桑田郡社会教育協会「高張りの由来」『北桑時報』第237号，2000年，34頁。

翻刻

・丁替わりは「」で示した。

「元治元年 田貫村惣堂
御堂普請諸造用覚帳

子夏始メ 世話方 半左衛門
萬藏
喜三郎 「

「 上り方覚

一三百目 佐々江村
幸十郎
口々之上り

山ノ神森 大工
一六拾匁 栄吉
豊吉

白ヶ谷
一五六拾五匁九分五厘 嘉兵衛

水谷森
一六拾五匁八分五厘 吉之助

山本
一貳百拾匁五分 新之丞

蔵王ノ森
一五百貳拾五匁九分 徳助

奥森
一七拾六匁八分 同人 「

「 柏貳本

一貳百拾貳匁五分 倉助

奥森 中佐々江

一四百目 小三郎

〆貳百七拾匁三分

子十月日

一壹百三拾五匁 庄屋
角左衛門
請取申候

一五匁 庄屋
吉之助
喜三郎入

又 宮の方木代
一五拾匁五分 萬ヨリ賈

一五匁 同人
糸めすの森

〆三百四十六拾六匁八分 「

「 覚 入札造用
一六拾五匁八分五厘 佐々江小十郎

檜賣造用

書付別有

四月十九日

一三拾貳匁八分 堂普請
相統度々
造用〆高

廿四日

一七匁五分 酒肴共
役人惣代
造用〆高

一拾三匁 手初造用
酒貳升
肴いろいろ

五月十九日	木切造用	廿七日	
一六匁五分	酒壹升	一拾三匁五分	酒貳升
	肴共		肴
廿日		廿八日	
一拾三匁五分	酒貳升	一三拾貳匁	酒八升
	肴共		」
廿一日		「 同日	
一拾九匁	酒三升	一七匁五分	大豆壹升
	肴共		肴いろいろ
「 五月廿一日		廿九日	
一三匁	なわ壹束	一五拾貳匁五分	酒三斗六合
同日		同日	
一壹匁八分	半し貳	一九匁	いろいろ肴
廿二日			五口メ
一六匁五分	酒壹升	六月朔日	
	肴	一 百 匁	酒貳斗四升五合
廿三日		同日	
一拾三匁五分	酒貳升	一拾匁	ふり焼
	さは三本		大貳本
	草さい	同日	
廿四日		一八匁	しろこ一升
一六匁五分	酒壹升		ろそく
	肴		しよやく
廿五日		七月日	
一六匁五分	酒壹升	一拾五匁	半左衛門
	肴		堂願書
廿六日	大工初	同日	造用メ
一拾三匁五分	酒貳升	一拾五匁	
	さは壹本		佐々江かじや
	いろいろ		万力直し
			ちん代

「十一月二日	立まく	同日	
一百六拾貳匁	酒貳斗七升	一九拾匁	米三斗
同日		十日	後勘定
一五匁	しよやく	一拾三匁五分	酒壹升
	いろいろ		肴半分
	ろそく	一三拾五匁五分	新之丞払
四日	石場二付前渡	〆壹貫三百貳拾六匁四分五厘	」
一六拾匁	酒壹斗		
同日		「	大工 栄吉
一拾貳匁	鯉大壹本	一壹貫三百目	豊吉
			木引 宇兵衛
四月六日			
一百八拾九匁	米六斗三升	一三百五拾匁	柚日用賃
			七拾人二渡ス
六日	色々		
一九拾三匁五分	酒壹斗七升	一五百六拾五匁六分	釘屋治衛門へ渡ス
			枚皮五拾束
四月六日		一四百目	定助渡し
一拾壹匁	〇貳升		半左衛門渡し
同日			
一五匁	しよやく	一七拾八匁	鍬黒(黒鍬)六人
	いろいろ		家鋪引
			石場直し
同日		一拾匁	中道寺
一貳匁	しよらゆ		地祭礼
	きわた	」	
「十一月八日		一貳匁	いろいろ備物
一四拾四匁八分	酒八升	一六匁	酒壹升
同日		一五匁	さいの者
一六拾七匁貳分	酒壹斗貳升		
同日		一拾貳匁	中道寺
一八匁	肴三貫		はん代
			惣代共
			」

「 一拾五匁	同先住ら 頼銀進上	「 一六拾七匁八分貳厘	口々之上り 別紙有
一貳拾匁	中道寺 丹後江歸り 二付進上	一三百八匁四分四厘	半左衛門 借用分
一貳拾匁	其節ちよ ちんぎ張 不失二付備 を以二相成	×三貫九百四拾八匁六厘	
内 拾匁	中道寺様 の胡麻段 樽菅本代 もらい二付入	引×百五拾貳匁四分四厘	半左衛門極
		一百目	木代人 山神の森
		引残五拾貳匁四分四厘	」
引×貳貫七百七拾三匁六分			
貳口合四貫百匁五分			
内上り方			
一三貫四百六拾六匁八分			
菅貫目	庄屋		
一百五匁	吉之助	」	

原戸^{はらと} 喜代里^{きよより} (文化財保護課 文化財保護技師 (建造物担当))